社会調査の対象としてのインドの独自性：アジア・太平洋価値観国際比較調査から

二階堂晃祐　　調査科学研究センター　　特任研究員

概要：当センターで 2009 年から実施している上記の調査は日本、米国、中国文化圏 4 地点（北京、上海、香港、台湾）、韓国、シンガポール、オーストラリア、インド、ベトナムの 11 か国／地点を対象としている。筆者は特にインド調査については、前身プロジェクトである環太平洋価値観国際比較調査から 2 回にわたり、データの分析のみでなく調査設計やサンプリングまで包括的に関わってきた。インドは社会調査の対象として、大変興味深い場所である。多様な言語、民族を包括し、また経済面では未だ発展の途上にある同国は、サンプリングや調査票作成等、手法面で難しい課題を突き付ける面もある。また、調査結果そのものの観点からも、独自の文化や価値観の存在が垣間見える変数が多い。ここではまだ初期段階ではあるがこれまでの分析に基づき、調査対象としてのインドの独自性を考える上で特に目を引く要素を俯瞰してみる。主に実質的な、各質問への回答やそこから垣間見える価値観の特性を考察する。最後に、インドで社会調査を行う上での手法面、技術面における困難についても少し言及しておきたい。

I. 他の 10 か国／地域と比較して、ほぼインドのみが「外れ値」と位置付けられる結果を示している変数が相当数存在する。

インドのみ、もしくはインドとその他 1 か国／地域のみが平均的な回答から大きく外れている（概ね、「平均的な」9、10 ヶ国の回答値が±5%以内に収まっていれば、インドは 10%以上外れている、もしくは±10%程度以内なら、インドは 20%以上外れている）質問は 30 ほどあり、このためインドは他国／地点と比べ回答傾向が大きく違う質問の割合が高い。ここではこれらの質問に着目して、その特徴を暫定的なキーワードとともに簡単にまとめてみた。

保守性と「伝統的」価値観

- 「長男は両親の面倒を見る」、「妻は夫に従う」、等のいわゆる「伝統的価値観」に賛成する割合はとても高い。
- 離婚はすべきでない、とする割合は69.8%と高い。（次点はシンガポールの43.9%、残り9地点は30%以下）
- 「能力の高い政治家に政治を任せる」とする割合が高い。
- 職場の上司に必要な資質として、「年功」を挙げる割合が比較的高い。

宗教心と信仰への自信

- 信仰心は篤い。94.9%は何等かの信仰がある。（次点はシンガポールの80.4%）
- 宗教団体を「とても信頼する」回答者は47.6%。（次点はベトナムの25.8%）
- 宗教について単に「分からなくとも違う宗教を尊重すべき」とする割合が低い。逆に、「自身の宗教を理解してもらえるよう努める」とする割合が高い。

上昇志向と経済的安定の希求

- 生涯暮らせるお金があれば「働くのを止める」割合がベトナムと並び低い。インドは14.8%、ベトナムは10%、他9地点は最低でも20%。
- 望ましい仕事の条件が、「安定している事」の割合が高い。逆に、「やりとげた感じ」は4.7%と低い。（次点はベトナムの15%、残り9地点は20から40%）

上記以外でも、科学技術の可能性への一般的な信頼の高さ、また契約を形式的なもの、と捉える傾向等に他の多くの国／地域との顕著な違いが見て取れた。これらの傾向の多くはインド独自の文化や精神性が表れている、と考えるよりはいわゆる「近代化理論」が言う意味での近代化が完成していないから、と解釈することも可能かもしれない。ただし、54 項目の中で個々の質問事項は優に 100 を超す当調査では、全体としてはインドも他国／地域に準ずる回答パターンが見られる質問の方が割合としてはむろん高い。独自性の解釈には今後とも、注意が必要と考えている。

II. 調査手法面でのインドの特異性と課題。

当インド調査は N=2030 で、実地調査は 2013 年 12 月に行われた。母集団は現実的な制約もありインド全土とはならず、主要 10 都市（Mumbai, Delhi, Kolkata, Chennai, Bangalore, Hyderabad, Ahmadabad, Pune, Ludhiana, Kochi）に住む 18～69 歳の有権者である。各都市にサンプル数を割り当てる段階では最新の(2011 年)国勢調査のデータが使用されたが、ただしそこからの地点の割り当てでは選挙人名簿が使用されている。これは、最新の国勢調査の都市内での細かい人口統計が、調査時点で公表されていなかった事も関係する。インドではそのような作業は、数年はかかるようだ。また、調査票作成はサンプリング以上に難しい面もある。今回、ヒンディー語以外の 7 言語は現地調査会社に頼らざるを得ず、訳文の正確さの確認は困難であった。